

東北 VALUE SIGHT 宮城



NPO法人 東鳴子ゆめ会議 理事長
大沼 伸治 (おおぬま・しんじ)

株式会社大沼旅館・五代目湯守。
2003年より農業やアートと湯治を結びつけ、現代の湯治場づくりに取り組んでいる。2008年にNPO法人東鳴子ゆめ会議が地域づくり総務大臣表彰を受賞。
NPO法人 東鳴子ゆめ会議
〒989-6811 宮城県大崎市鳴子温泉赤湯34
(旅館大沼内)
TEL 0229-83-3052・FAX 0229-83-3927
<http://www.ohnuma.co.jp/>

まちづくりにおいて、地域資源を最大限に生かすことは大切な要素である。宮城県の東鳴子温泉では「湯治」でまちを活性化しようという温泉地ならではの発想で、現代的な感覚で「湯治」を復活させた取り組みを行っている。

現代の湯治場 を目指して

衰退する湯治場

日本各地の温泉地は戦後の高度成長期に乗って客足を大きく伸ばした。団体客を中心とした旅行会社からの大量送客は施設の大型化を促した。この時期、多くの湯治場が「脱湯治」を掲げ、旅行ブームに乗りおくれなよう旅行客獲得に力を入れた。農漁業をはじめとする日本の一次産業従事者などを支えてきた「湯治」はこの頃から、レジャーブームの中で脇役へと姿を変えてゆく。「湯治」は温泉地に滞在し、繰り返し湯に浸かり、温泉の力をいただくことで心身を再生することだ。心身のバランスを崩し、多くの人が半病人と言われる現代社会において、そのシンプルな自然療法的保養スタイルはもっと見直されるべきである。現在そうした伝統的保養文化「湯治」はまだ一部の湯治場では根強く残っているものの、全体的に衰退の一途をたどっている。現代人にもマッチした湯治のあり方が求められている。

現代の湯治場を目指して

1,200年の歴史を持つ鳴子温泉郷は約400本の源泉が湧き、日本にある11種類の泉質のうち9種類までが楽しめるという温泉天国である。東鳴子温泉は鳴子温泉郷の中にあり、湯治場の伝統を受け継ぐ閑静な温泉地だ。13軒の大小さまざまな温泉宿があり、自炊専門から団体宿までいろいろなバリエーションがある。

この地域で、ここ数年「湯治」を現代に生かすべく、現代の湯治場づくりに取り組んできたことに少し触れてみたい。

東鳴子温泉で地域づくり的な動きが始まったのは、平成14年の春である。目標となったのが、明治43年の洪水で消失した伊達藩の御用湯「御殿湯」の復活。これといって名物や見所もない東鳴子温泉に、外湯として「御殿湯」を復活させ入湯客に楽しんでもらおうと考え、観光協会の役員を中心に、御殿湯復活に向け奔走した。しかし、思いだけが先行し、計画はわずか1年で頓挫してしまった。

ちょうどその頃、ある方から「御殿湯を復活させたいのはわかるが、地域は一つになっているのか？」という問いをもらった。まさに目からうろこが落ちる思いだった。理想に燃えるのはよいが、地域が一つになっていなければどんなことをしても地域は良くならない。まずは地域に住む人々が業種や立場を越えて、思いを一つにしてゆくことが先決であるという振り出しに戻った。

「東鳴子ゆめ会議」発足

改めて地域に目を向けたわれわれは、まず地域の垣根をはずすプラットフォーム的な組織「東鳴子ゆめ会議」を立ち上げた。旅館組合、観光協会、そして住民組織である町内会の真ん中に位置する新組織である。お互いに足りない部分を補いながら機能し、町全体の風通しを良くすることを目指した。この時期に宮城県の地域振興課の方々と出会い、今日にいたるまで官民連携で地域づくりを進めている。行政との連携はわれわれの地域づくりの大きな推進力となり「東鳴子ゆめ会議」は平成19年にNPO法人となった。

また、平成16年から、近所で米作を営む農家さんの田んぼを借りて「田んぼ湯治」の取り組みを始めた。普段土に触れる機会のない都市部の人に、田んぼ作業に精を出してもらい、農家さんの茶の間で、採れたての野菜で作るお昼をごちそうになり、温泉でゆったり汗を流すというものだ。参加者は小さな子ども連れの家族からシニアの方々まで幅広い。田んぼ仕事を体験することで、お子さんがごはんを残さなくなったという話を聞いた。また、80才近い農家さんが、長い間の農業経験を若い人達に伝える時の笑顔が素晴らしかった。残念ながら平成21年元日に、田んぼを借りていた農家さんが急逝し、5年間に渡った田んぼ湯治は終了となった。

その後、平成21年からは、NPO法人トージバが全国展開している大豆レポリューションに「地大豆湯治@鳴子温泉郷」として湯治場ではじめて参加し、大豆を育てながら、温泉を楽しんでいる。

湯治場という「場」

東鳴子温泉では、ここ数年湯治と現代アートの融合を試みている。湯治場にアーティストが滞在しながら、作品の製作展示を行い、その作品を入湯客に楽しんでもらおうというものである。平成22年度は湯治全盛時代に使われた旅館の別館の部屋を、子どもとアーティストと一緒に改装した。「ピタゴラスイッチの

間」「コレクターの間」などユニークな館内は、子どもたちだけでなく入湯客にも好評だった。地域づくりにアートを取り入れることは、住民達が普段とは違う価値観に向かい、ともに作品の製作展示の手伝いをする事で互いのつながりを深め、風通しが良くなるきっかけになると感じている。

われわれは現代の「湯治場」をよみがえらせるためにさまざまな取り組みをしているが、その究極の目標は、天の恵みである温泉を中心に人と人が交流し、心身共に元気になれる「場」を作ることによって尽きる気がする。冒頭にも触れたが、現代では多くの人が心身のバランスを崩している。ネット隆盛でバーチャルな関係は簡単に結べる時代になったが、リアルに人がふれあう機会はどんどん減っている。大自然の力を伝える湯治場というコミュニティは、課題の多い現代社会でこそ機能すべきである。

この夏の1か月間「千年湯治」というイベントを行った。入湯客と地域間のネットワークづくりに重きを置いたものだったが、これからも地域が一体となって人々を迎え入れていくことが、地域活性化の鍵になると信じている。



地大豆湯治@鳴子温泉郷の種まき大作戦の様